県立博物館総合調査報告書Ⅱ—渡名喜島—，17～31，1981

渡名喜島の陶磁器

宮城　篤正*

渡名喜島へ渡る唯一の交通機関といえば船である。現在、第一久美丸（170屯）が同島と泊港南岸との間に就航している。船のダイヤルは隔日でしかも不規則であるので前もって確かめておく必要がある。所要時間はおよそ3時間で大人の片道運賃は￥1,200である。

乗船してすぐ目についたのがデッキに積上げられた日用品や食糧品の詰った段ボール箱であった。それらの箱の中味は細々とした日用品に至るまでいちいち荷作りして那覇から送るのであるが、そこに島の生活の一面が顔をのぞかせていた。

出航時間の定刻9時30分より10分ほど早目に船は岸を離れた。海上に出ると実に心地よい海風がほほをなでる。慶良間の島々がしだいに近ずくにしたがって、それらの島は形をさまざまに変化させては遠ざかっていく。この繰り返えしが何度もやってくるのでなかなか興味をひくものがあった。

また、海面に目を移すと吸い込まれるような深く濃い藍色の海面の美しさはしばし我を忘れさせる。船は純白の波しぶきをあげながら、西方へと進むが、ようやく慶良間の島々が後方へ遠ざかろうとする頃から飛び魚が波間に飛び交う情景が小生の目を楽しましてくれた。

いよいよ船が渡名喜島の近くまで進んだ頃に船尾に長く流してあった疑飼に大きな魚が喰いつき波間に跳ねていた。それを目撃した船員は合図の指笛を大きく吹いて船のエンジンを停止させた。船が減速した間に糸をたぐり寄せて魚を船上へ引き上げた。魚は甲板で飛び跳ねていたが、尾びれを足でふみつけられ、釣針をはずすが早いか、すばやく魚は船倉へ放り込まれた。あとで人に聞いて知ったのであるが、魚の名はマンビチャー（フーヌイユともいう。）であった。船は再びエンジンを始動させて動きだしたが、島に接近するにしたがって大きな岩山が目前に迫ってきた。その岩山を右手にみながら船は大きく島の左側からまわり込むように港へはいって行った。海から望める渡名喜島の部落は南北の山の谷間の底地に東西の方向に広がっていた。

港では村教育委員会の比嘉軍次郎氏が出迎えてくれた。一応、村民会館に行って中食をとってから午後教育委員会を訪ねた。教育長の桃原茂一氏に挨拶をしたあと、調査の打ち合せを行なった。そのとき知ったことであるが、同じ船で南部教育事務所や巡回医療班の方々と一緒に乗りあわせていた。小さな島なので村役場や教育委員会でもかち合う結果になった。そんな事情もあって小生の調査開始は明日からということになり、そして調査の2日間は比嘉氏がずっーと同行してくれることになった。

早々に打ち合せが済んだのでひとまず部落全体の様子をつかむため、午後3時頃から一人で部落内を歩いてみた。いつもそうであるが、はじめての地域はなんにでも興味を抱くものである。幸わいなことに島に滞在している間はずっーと晴天に恵まれたのはよかったが、部落全体が砂地であり、その輻射熱は大変なものでとても暑かった。

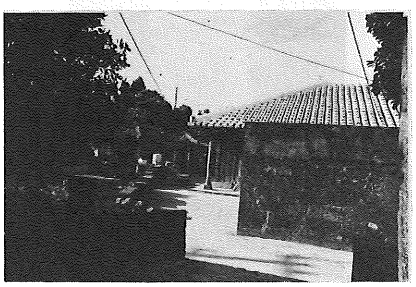


写真1．渡名喜島の代表的民家（昭和55年6月撮影）

（*みやぎ　とくまさ　普及係長）

村勢要覧（昭和54年４月）によると、渡名喜村は渡名喜島（周囲約８km）と入砂島（無人島）の二島から成り、人口 678名（内訳は男 328名、女 350名）のごく小さな村である。

部落内を歩いてみてまず目についたのはどこの屋敷も道路より低く堀りくぼめられているのが特長であった。聞くところによると、昔は屋敷が低ければ低いほどその家の人は働き者といわれ、嫁になり手も多かったといわれる。地形的にみると、西から東へ海風が吹き抜けるようになっている。だから昔は屋敷が低いほど強風から家を保護することが出来たわけで、島の地形から工夫した人々の知恵であろうか。

ところで最近では島でもブロック建築が増えつつあり、今度は逆に昔の低い屋敷を埋め戻して平地にして建築をしている。ブロック建築だと台風にも全く心配がいらないからである。しかし、涼しさの点では必ずしも優れているとはいえない。このように徐々にではあるが島の様子が年々変化しつつあった。

今回の調査は当館の昭和55年度総合調査地が渡名喜島であり、小生は島に伝わる陶磁器、絵画調査が主目的であった。この総合調査は前年の粟国島につぐものであった。

幸いなことに渡名喜村は沖縄戦でもあまり損害を受けなかった島である。それだけに現存する陶磁器、絵画関係資料におおいに期待をかけて島に渡った。

写真２．原名標識（昭和55年６月撮影）
註１

昭和54年、渡名喜村当局と村教育委員会とによって「生活民具展」が開催され、そのときのパンフレットが幸いなことに手元にある。この資料によってある程度、事前にチエック出来たのはありがたかった。調査してみて、やはり絵画資料はなかったので、結局は陶磁器調査だけにしぼることになった。更に今回は前述した「生活民具展」に出品されなかった陶磁器資料、たとえば各民家の仏壇中央におかれている香炉なども可能なかぎり調査することにした。その結果、やはり旧家であればあるほど伝世する香炉類も陶磁器同様立派であることがわかった。

なかでも屋号ウィーヌャー（渡口幸栄氏宅）の仏壇には中国明代（1368～1662）の堂々たる青磁香炉が置かれ、いまでも使用されていた。他に壺屋焼の緑釉香炉の立派なものもあった。香炉の三足ともほぼ途中まで釉がかかっていて、勿論底部にはたっぷり緑釉がかかっている。美しい緑釉と端正な形といい、なかなかいい作品である。

一方、屋号、コウチヤーグヮー（上原政之氏宅）の香炉には白化粧を施こし、全体に細かい貫入がはいっていた。底部と足には釉をかけてないが、形も堂々としていて古い壺屋焼の代表作でおろう。

前述のウィーヌヤーと並んで島の旧家に屋号イージョー（上門）がある。そこの仏壇にも実に堂々たる染付香炉があった。端正な形といい、ゴスと飴の混入した釉でもって染付してあって古い時代に壺屋の陶工に注文して作らせた作品ではなかろうか。香炉全体に細かな貫入がはいり、なかなか立派な香炉である。

屋号トーバルヘーバルドンチ（桃原ツル子氏宅）にも灰釉香炉が伝わっていた。香炉全体に細かい貫入がはいり、三つ足には鬼面が施こされている。窯は湧田窯か初期壺屋窯の作品かと思われる。

宮平春栄氏宅（屋号ムトンヤー）の仏壇には白釉香炉がある。おそらく初期壺屋焼と思われるが、全体に細かい貫入のはいったなかなか立

派な作品である。

以上の他にも、すばらしい香炉がいくつかあったがこれまで述べたものに代表させて他は割愛する。

次ぎに渡名喜瓶について少しふれておこう。桃原又一氏宅（屋号イートーバルヤー）には緑釉流渡名喜瓶１個が伝世していた。作品の上方には緑釉、下方には灰釉、そして胴部には緑釉を流し作品全体をひきしめている。

また、上原政之氏宅（屋号コウチヤーグヮー）にも渡名喜瓶が２個保存されていた。この２個は、各々異なる手法が施こされていて決して対で使用されたものではない。

現在、渡名喜島には以上の三点だけしか確認されていない。問題はなぜ「渡名喜瓶」と呼んでるのか。この特殊な形をした酒器（写真２、17参照）についてはまだよくわからない。渡名喜島は王国時代に単独に奄美諸島方面へ船をだして貿易をしていたと伝えられている。この話から壺屋に多量にこの種の製品を住文したことから「渡名喜瓶」の名称がつけられたのだろうと考える人もいる。果して王府が渡名喜島だけを特別に貿易をしてよいと認めたかどうかよくわからない。ただ名越左源太が書いた『南島雑話』のなかに壺を売り歩く人の図がある。説明に「本琉球より来る壺売度祭貴島の人」とある。度祭貴島は渡名喜島だと思われる。だがしかし、渡名喜瓶に関しては奄美地方からは現在あまり多くはみつかっていない。むしろ逆方向の宮古、八重山地方に多く伝わっていた事実がある。それに肝心の渡名喜島には前述した三点のみしか発見されていない。あるいは渡名喜島とは全く関係がないのかも知れない。いずれにしてもいまの段階においてはなお不明な点が多い資料である。

一方、銘入りの徳利型の喜名焼壺がある。所有者は上原勉氏（屋号ユジャーヤー）で壺の胴部に肩からタテー列に「寛文十二年壬子十月吉日比嘉殿内御口」と釘彫りで銘文が彫られている。寛文十二年は西暦の1672年である。改行沖縄の厨子甕の銘書きの年号とか壺に記された年号は殆んど例外なく中国年号が使われている。したがって寛之十二年の日本年号を使用した例はきわめて珍らしいものである。壺の胴部を注意深く観察すると、予想した通り石英粒の混入がはっきり確認出来た。

また。肩から胴部にかけて４ケ所にわたって灰釉が流し掛けられている。更に壺全体に泥釉がたっぷり掛けてあり、赤味がかっているのも喜名焼の特徴をよくあらわしている。首から肩にかけて11本の刻線がぐるぐる施こされている。現在、比嘉殿内の所在がはっきりわからないので、伝えられた経路も不明であるが、この種の壺は古酒を貯える容器としては最適のものである。おそらくは酒容器として大切に使用されてきたものと思われる。

他にかわった陶器といえば渡口幸栄氏（屋号ウイーヌヤー）所有のシタ貼付文抱瓶がある。といってもこの作品には注ローカ所しかつけてないばかりか、耳の取付けられている位置も他に類例がない。したがって変形抱瓶と呼んだ方が正しいのかも知れない。全体的にうまく焼締まっているが施釉はない。胎土も細かく全体的に暗紫色である。筆者は以前からこの種の陶器を琉球紫泥と名付けている。

一方、宮平春栄氏（屋号ムトンヤー）所有の六角向付皿(皿の見込中央に六角形向付を接合した特殊な器具である。）が変り種である。仕切りはないが、おそらく東道盆と同じ使用目的をもつ作品であろう。今日ではさしずめ刺味皿として使用したいものである。 向付と皿の内側（見込）はワラ灰釉が使用され、向付と皿の外側は飴釉が施こされている。

桃原又一氏（屋号ウィートーバルヤー）所有の無地高坏は焼き方が弱く、なかなか特長をつかみにくいが、おそらく薩摩焼きであろう。正月のとき、この高坏に塩を盛り上げて一番座におき、ハチイリー(最初のお客様で必ず男の人で大人でも子供でもよい）を迎える。まず、そこで新年の挨拶を交わし、さかずきで酒をさしあ

げたのち、高坏に盛れたカリーマース（縁起を祝う塩）をお客の手のひらに少しのせてあげる。お客は手のひらの塩をなめてハチイリーの役目を終る。このように特殊な使用方法の器でこれまで沖縄ではあまり類例がなく、きわめて珍らしい作品である。民俗学の方からも興味ある資料と思われる。

以上の他に渡名喜島にはシャム南蛮甕が５点、信楽腰白壺が２点、南支系南蛮甕が２点、古伊万里染付徳利２点、薩摩焼茶壺１点、紫泥酒注10点余、中国製染付碗ならびに皿類がかなりの数伝来していた。

島にいろいろ各地の焼き物が請来されていることは、かって渡名喜島の人々が方々へ出掛けていって持ち帰ったものが殆どであろう。

比較的新しい時代になると、壺屋の荒焼壺や味噌甕、スーチキガーミ、水甕などが数多く運ばれてきて使われた。これらの資料は現在、どこの家でも不要になって屋敷の一隅にころがしてある。この情景は渡名喜島も例外ではなく他地域と同様、時代の移り変わりを強く感じさせる一面をのぞかせていた。

（註１）写真２の「原名標識」について

陶磁器調査で部落内を歩いて偶然に発見した資料である。この標識のみつかった場所は渡名喜村1934番地、屋号バンジュヌハタ（南風原ふじ子氏）の屋敷内の豚小屋の壁面にたてかけてあった。碑面には「れ　すった原」と文字が刻まれていた。沖縄本島でもまだ正式名称はわかっていないが、通称「ハル石」とか「パル石」と呼ばれ、文献に「印石」と記録されているものと同一資料と思われる。

同様な資料がこれまで浦添市内でも三個発見されているので、筆者は一見して原名標識ということがわかった。この標識はもともとシッタ原（元の小学校敷地週辺）にあったものを前記場所へ運び込だものであろうが、そのときは全く意味がわからなかったと思われる。それに同資料は豚小屋が道路に直面する所にたてかけらていたところからみると、おそらく「石敢當」の役目になるものと考えていたのであろうか。現在、その家の人は大阪の孫のところへ行っていて、ずっーと空家になっていて詳しいことは聞き取れない。

島の多くの有識者に訪ねても誰一人として知っていなかったことから、同資料は筆者がはじめて確認したことになる。

〈寸法〉タテ65.5cm、ヨコ22.8cm〉17.5cm
厚み6.3cm

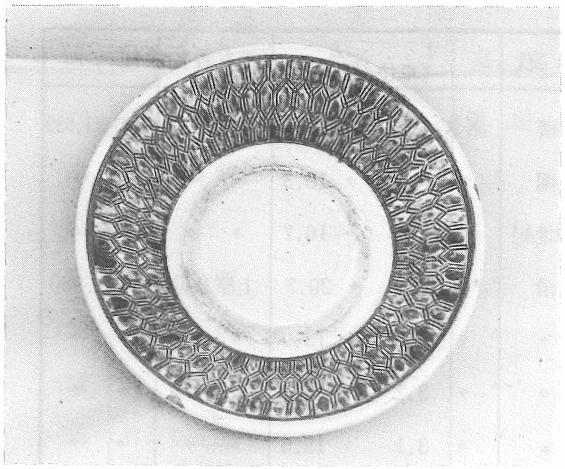
陶磁器資料一覧

	品　　名	窯　名	時　代	寸　法（単位cm）	所有者名	住　所
1	線彫亀甲文中皿	壺　屋	19世紀	高さ5.7　径22.0	比嘉義信	渡名喜1,838
2	コバルト染付広口花生	〃	〃	〃27.5　口径23.7	〃　〃	〃　〃
3	コバルト染付鉢	佐賀県有田	〃	〃7.8　〃 29.0	〃　〃	〃　〃
4	シャム南蛮甕	タイ国	15~16世紀	〃 60.7　〃 19.0	宮平春栄	〃1,933
5	白釉香炉	壺　屋	18世紀	〃 10.3　〃 18.0	〃　〃	〃　〃
6	六角形向付（むこうづけ）付皿（仮称）	〃	19世紀	〃 5.7　径24.7	〃　〃	〃　〃
7	飴釉茶入	〃	〃	〃23.0　幅径21.7	〃　〃	〃　〃
8	灰釉香炉	〃	18世紀	〃13.5　口径18.1	桃原ツル子	〃1,963
9	竹筒型花生	〃	19世紀	〃28.3　〃 14.0	〃　〃	〃　〃
10	緑釉角瓶	〃	〃	〃 7.7　タテ 6.7　ヨコ 11.9	〃　〃	〃　〃
11	黒釉アンダガーミ	〃	20世紀	〃21.7　口径11.7	〃　〃	〃　〃
12	紫泥赤絵酒注	中　国	清	〃17.5　〃 6.0	〃　〃	〃　〃
13	染付山水文角瓶	有　田	19世紀	〃 7.6　タテ 6.6　ヨコ 12.1	〃　〃	〃　〃
14	緑釉流渡名喜瓶	壺　屋	〃	〃16.1　口径3.4	桃原又一	〃1,875
15	灰釉徳利	〃	18世紀	〃14.7　〃 2.5	〃　〃	〃　〃
16	無地高坏	薩摩（？）	19世紀	〃18.2　〃 20.0	〃　〃	〃　〃
17	輪模様瓶子	壺　屋	〃	〃16.1　〃 4.7	〃　〃	〃　〃
18	緑釉飛し油壺	薩　摩	〃	〃12.0　〃 2.7	〃　〃	〃　〃
19	染付唐草文碗	中　国	清	〃 7.0　〃 15.0	〃　〃	〃　〃
20	紫泥油注	〃	〃	〃11.6　〃 6.9	〃　〃	〃　〃
21	紫泥酒注	〃	〃	〃 7.2　〃 5.4	〃　〃	〃　〃
22	シャム南蛮甕	タイ国	15~16世紀	〃58.2　〃 19.0	屋号、上門	〃1,831
23	黒釉茶入	壺　屋	19世紀	〃20.2　〃 6.6	〃　〃	〃　〃
24	線彫人物鳥文花生	〃	大正~昭和	〃30.7　〃 8.2	〃　〃	〃　〃
25	黒釉ヒーマカヤー	〃	19世紀	〃10.5　〃 16.0	〃　〃	〃　〃
26	薩摩焼壺	薩　摩	〃	〃30.1　〃 8.3	〃　〃	〃　〃
27	染付徳利	有　田	明　治	〃27.0　〃 4.3	〃　〃	〃　〃
28	染付香炉	壺　屋	19世紀	〃10.6　〃 23.2	〃　〃	〃　〃

No.	品　　名	窯　名	時　代	付　法（単位cm）	所有者名	住　所
29	白釉香炉	壺　屋	19世紀	高さ12.5　口径21.0	上原政之	渡名喜1,819
30	渡名喜瓶	〃	〃	〃 14.6　〃 3.1	〃　〃	〃　〃
31	〃　〃	〃	〃	〃 15.5　〃 3.4	〃　〃	〃　〃
32	貼付文壺	〃	昭和18年頃	〃 22.4　〃 9.3	〃　〃	〃　〃
33	飴釉香炉	〃	19世紀	〃 7.4　〃 10.0	〃　〃	〃　〃
34	火　取	〃	20世紀	〃 8.9　〃 10.2	〃　〃	〃　〃
35	竹筒型花生	〃	19世紀	〃 29.3　〃 11.5	上原晧正	〃 1,821
36	緑釉流香炉	〃	〃	〃 14.6　〃 20.7	〃　〃	〃　〃
37	喜名焼壺（銘入）	喜　名	16~17世紀	〃 43.3　〃 13.0	上原　勉	〃 1,832
38	信楽腰白茶壺	滋　賀	17世紀	〃 36.2　〃 16.0	上原トミ	〃 1,811
39	シャム南蛮甕	タイ国	15~16世紀	〃 47.5　〃 16.0	〃　〃	〃　〃
40	〃　〃	〃	〃	〃 61.2　〃 17.8	渡口幸栄	〃 1,939
41	〃　〃	〃	〃	〃 56.0　〃 21.0	〃　〃	〃　〃
42	南支系南蛮甕	中　国	清	〃 53.0　〃 20.0	〃　〃	〃　〃
43	〃　〃	〃	〃	〃 28.9　〃 16.0	〃　〃	〃　〃
44	信楽腰白茶壺	滋　賀	17世紀	〃 27.4　〃 8.8	〃　〃	〃　〃
45	飴　釉　壺	壺　屋	19世紀	〃 16.5　底径 8.4	〃　〃	〃　〃
46	荒　焼　壺	〃	〃	〃 46.4　口径14.5	〃　〃	〃　〃
47	蔦貼付文抱瓶	〃	〃	〃 8.8　タテ 4.2　ヨコ 19.8	〃　〃	〃　〃
48	染付対瓶	有田か	〃	〃 20.2　口径 2.8	〃　〃	〃　〃
49	染付菊花文徳利	有　田	〃	〃 22.2　〃 5.8	〃　〃	〃　〃
50	赤絵茶碗	京都か	〃	〃 5.7　〃 9.7	〃　〃	〃　〃
51	白釉チブ	壺　屋	〃	〃 2.0　〃 3.2	〃　〃	〃　〃
52	灰釉チブ	中　国	〃	〃 2.2　〃 3.7	〃　〃	〃　〃
53	紫泥酒注（6点）	〃	清		〃　〃	〃　〃
54	染付寿字文鉢	〃	〃	高さ12.5　径25.7	〃　〃	〃　〃
55	染付龍文皿（2枚）	〃	〃	〃 3.5　〃 19.7	〃　〃	〃　〃
56	染付草花文皿	〃	〃	〃 3.8　〃 20.3	〃　〃	〃　〃

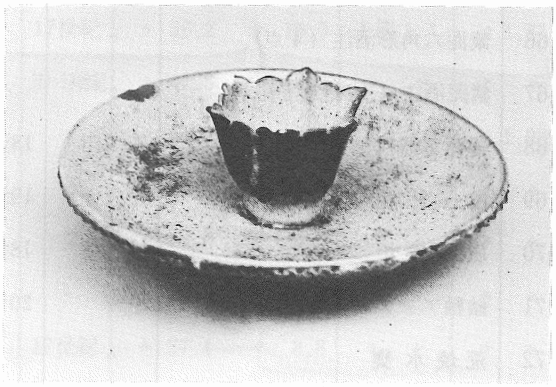
No.	品　　名	窯　名	時　代	寸　法（単位cm）	所有者名	住　所
57	染付牡丹唐草文湯呑	中　国	清	高さ 4.9　径 9.6	渡口幸栄	渡名喜1,939
58	青磁香炉	〃	明	〃 7.4　〃 18.3	〃　〃	〃　〃
59	緑釉香炉	壺　屋	19世紀	〃 8.8　〃 16.7	〃　〃	〃　〃
60	色絵草花文皿（2枚）	中　国	清	〃 3.6　〃 20.7	上原誠徳	〃 1,980
61	染付支那人物文皿（12枚）	〃	〃	〃 3.2　〃 15.9	〃　〃	〃　〃
62	染付草花文皿（3枚）	〃	〃	〃 3.2　〃 15.5	〃　〃	〃　〃
63	染付岩に梅、うぐいす図皿	〃	〃	〃 3.1　〃 15.6	〃　〃	〃　〃
64	染付岩に蘭、菊図皿（4枚）	〃	〃	〃 2.9　〃 15.0	〃　〃	〃　〃
65	染付皿	〃	〃	〃 2.9　〃 15.5	〃　〃	〃　〃
66	紫泥六角形酒注（4点）	〃	〃	〃 10.2　〃 15.9	〃　〃	〃　〃
67	紫泥酒注（4点）	〃	〃		〃　〃	〃　〃
68	葡萄文徳利	有　田	18世紀	高さ24.8　口径 5.6	〃　〃	〃　〃
69	白磁徳利	平佐か	19世紀	〃 17.6　〃 3.6	〃　〃	〃　〃
70	灰釉香炉	壺　屋	18世紀	〃 12.6　〃 20.8	〃　〃	〃　〃
71	飴釉アンダガーミ	〃	20世紀		上原　宏	〃 1,960
72	荒焼水甕	〃	〃		比嘉範明	〃 1,868
73	飴釉香炉	〃	19世紀	高さ10.5　径20.8	親国	
74	飴、コバルト飛香炉	〃	20世紀	〃 8.0　〃 13.0	〃	
75	彫絵人物文把手付瓶	〃	昭和		桃原定美	〃 1,862
76	線彫人物、魚、ひまわり文壺	〃	〃		〃　〃	〃　〃

図版 1

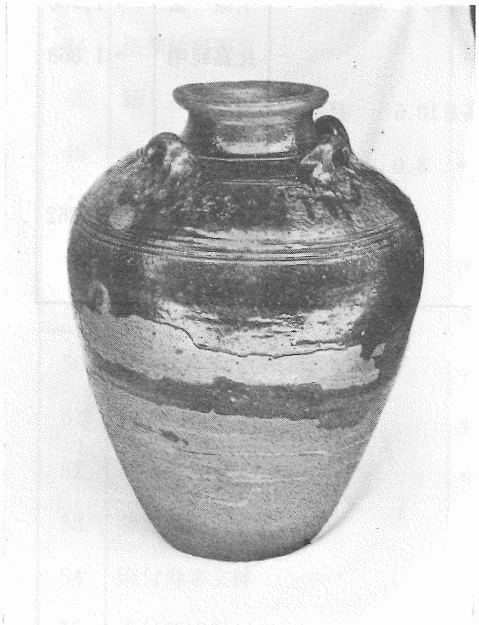


1　線彫亀甲文中皿（資料一覧 1）

2　広口花生（資料一覧 2）



4　六角形向付付皿（資料一覧 6）



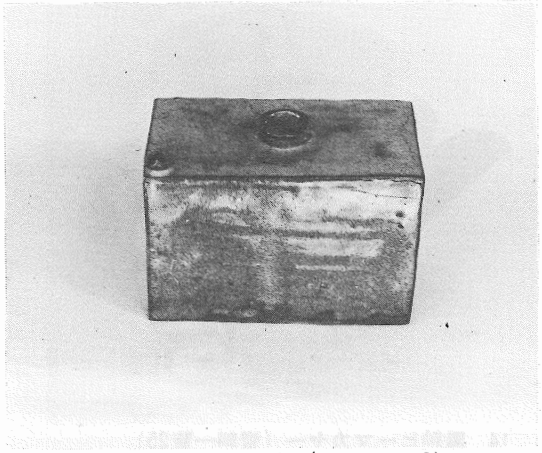
3　シャム南蛮甕（資料一覧 4）

5　灰　釉　香　炉（資料一覧 8）

図版 2

6　竹筒型花生（資料一覧９）

9　緑釉流渡名喜瓶（資料一覧14）



7　緑　釉　角　瓶（資料一覧10）

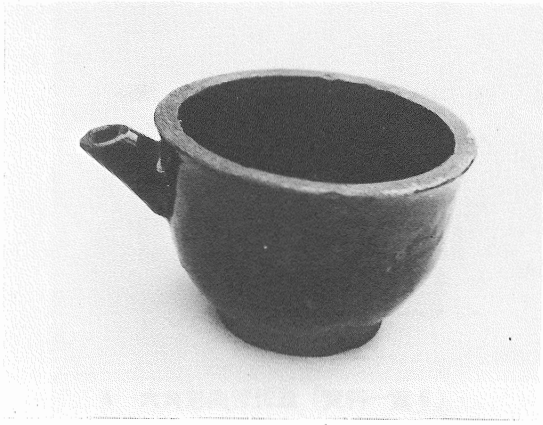
8　紫泥赤絵酒注（資料一覧12）

10　台　付　皿（資料一覧16）

図版 3

11　シャム南蛮甕（資料一覧22）

12　黒　釉　茶　入（資料一覧23）



14　黒釉ヒーマカヤー（資料一覧25）

13　線彫人物鳥文花生（資料一覧24）

15　染　付　香　炉（資料一覧28）

図版 4

16 白 釉 香 炉（資料一覧29）

17 渡 名 喜 瓶（資料一覧30、31）

18 火 取（資料一覧34）

19 緑釉流香炉（資料一覧36）

20 喜 名 焼 壺（資料一覧37）

図版 5

21　シャム南蛮甕（資料一覧41）

22　信楽腰白茶壺（資料一覧44）

23　蔦貼付文抱瓶（資料一覧47）

24　紫泥酒注（６点）（資料一覧53）

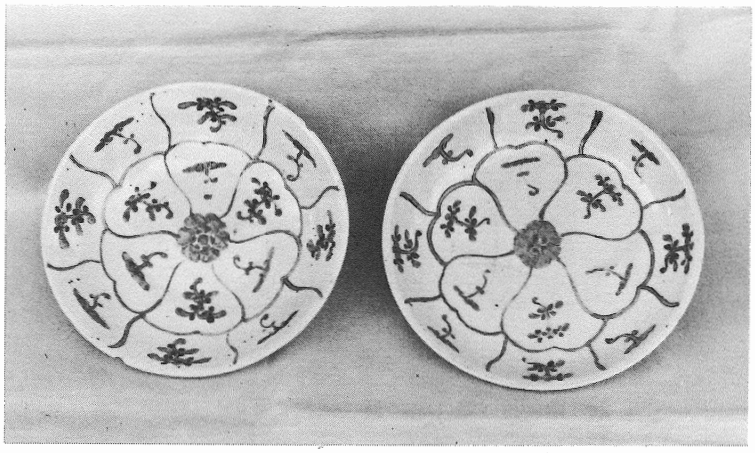
図版 6

26 染付竜文皿（資料一覧55）

27 青磁香炉（資料一覧58）

図版 7

28 緑 釉 香 炉（資料一覧59）



29 色絵草花文皿（資料一覧60）

30 染付支那人物文皿（資料一覧61）

図版 8

31　染付草花文皿（資料一覧62）

32　紫　泥　酒　注（資料一覧67）

33　灰　釉　香　炉（資料一覧70）